

## SEL 観点からの哲学対話実践報告

Report of philosophical dialogue  
from the point of view of Social and Emotional Learning

藤平 昌寿\*1

Masatoshi FUJIHIRA\*1

\*1 帝京大学, \*2 放送大学大学院

\*1Teikyo University, \*2The School of Graduate Studies, The Open University of Japan

Email: mail@fujipon.com

あらまし：前々稿・前稿と、哲学対話に関する発表を行った。2021年開催の第46回大会プレカンファレンス「SEL (Social and Emotional Learning) の高等教育への適応」において、哲学対話の体験を筆者のファシリテートにより実施した。この実践を SEL の観点も含めながら振り返りたい。

キーワード：対話, 哲学, コミュニケーション支援, 協調学習, グループ学習

## 1. はじめに

筆者はこれまでの本大会において、対話 (dialogue) に関するプレカンファレンス・企画セッションに参加してきた。その縁から、2021年開催の第46回大会プレカンファレンス「SEL (Social and Emotional Learning) の高等教育への適応」において、哲学対話の体験を筆者のファシリテートにより実施した。この実践を SEL の観点も含めながら振り返りたい。

SEL では、育むべき能力として、以下の5つを挙げている。

- ① Self Awareness (自己の理解)
- ② Self Management (セルフマネジメント)
- ③ Social Awareness (社会や他者の理解)
- ④ Relationship Skill (対人関係スキル)
- ⑤ Responsible Decision Making (責任ある意思決定)

哲学対話については以前の拙稿<sup>(1)(2)</sup>でも触れているので、ここでは省略する。なお、大会全体がオンライン開催であったため、本プレカンファレンスもオンラインにて実施した。哲学対話を行う際のルールとしては、以下の項目を予め提示している。

- ・ 何を言っても良い
- ・ 他人を否定しない、茶化さない
- ・ ただ聞いているだけでも良い
- ・ お互いに問いかけてみる
- ・ 知識ではなく、自分の経験で話す
- ・ 結論が出なくても、意見が変わっても OK!
- ・ 分からなくなってもいい
- ・ 参加者は全員平等
- ・ 小学生にも分かる言葉で話す
- ・ 話せる人は一人ずつ

## 2. 対話の実践

2時間 50分の時間の中、大きく2回の対話セッ

ションを実施した。初めに筆者より哲学対話や前述のルールについての説明、参加者の自己紹介を経て、第1セッションは参加者内の提案から「対話で争いは回避できるか？」というテーマで対話を開始した。対話初期段階での主な意見は以下の通り。

- ・ 「話し合いの質によるのでは？」
- ・ 「共感とか前提、ルールによって変わる？」
- ・ 国レベルの話がいくつか出る
- ・ 「そもそも、争って何？ 平和って何？」
- ・ 「夫婦・兄弟・親子でも争いは起きるよね？」
- ・ 「夫婦って、元々好き同士という前提がある。」
- ・ 「価値観の違いでは？」
- ・ 「争いになるまでのコミュニケーションの量や質による？」

これらの意見に対する、あるいは付随・発展する意見として、主に以下の意見が提示された。

- ・ 「これまでの話で、争って悪の部分が必要しも 100%では無い気がする」
- ・ 「暴力が無ければ、平和では？」
- ・ 「肉体的だけではなく、言葉の暴力もある。」
- ・ 「相手に苦痛を与えるのが争いでは？」
- ・ 「良いストレス・悪いストレスがあると思う」  
→「これはどちらにもなり得る。行ったり来たり出来る」→「SEL ではこの幅を広げる？」

更に後半では、少し違う方向での意見や話題も提供された。

- ・ 「大学の授業で合意形成 WS をしている」→「正解は無い」「多数決は×」「少数意見を聞こう・大事にしよう」→「どうしても正論をぶつけ合う場面が出てくる」→「正論でも反論でも一旦受け止めよう」
- ・ 「正論同士のぶつかり合いも、互いに"自分が

正しい"と"思"って"言"っている、すなわちそれぞれの"正義"。前段の"相手に苦痛を与える"ための争いというの、そんなこと思っていない可能性もある"→"「いったん受け止めるというの、最初の"共感"に通ずるものがある」

- ・ 「共感を得るためには、"理解してもらえた上での話し合い"が必要"→"「小学生にも分かるように話す"は大事」

### 3. リフレクション

第1セッションを終了し、参加者による感想をシェアした。特に対話の前後の自身の変容に着目しながらアウトプットしてもらった。感想の後の丸数字は前述のSELの5能力のどの部分に関連するのかわを示した。

- ・ 「言語化することによってクリアになった」①②
- ・ 「争いやストレスの見方が少し変わった、その先の考え方が変わった」③
- ・ 「具体化できた。相手を理解できないと難しい」①③
- ・ 「良い方向の争いもある」③
- ・ 「相手が苦痛を感じると争いになる」③⑤
- ・ 「国家間でも対話できそう」④⑤
- ・ 「ジレンマを与えるWSをさせたくない。学生を社会に出した際にどうなるのか？どうするのか？が気になる。」④⑤
- ・ 「論としての"正論"は、一本の槍でしか無いと感じた」③④
- ・ 「身近な視点の方が分かりやすい。教育への活かし方が大事。もやもやした方が居たのはgood!」①②
- ・ 「無理やり結論を出す必要は無い。」②③

### 4. 教育やSELへの活用

続く第2セッションでは、本プレカンファレンスの題目に関連し、「対話を教育やSELに活かすには？」をテーマとして対話した。近似的意見をグルーピングして示す。前項同様、SEL5能力の関連部分を丸数字にて示す。

トレーニングについて

- ・ 「対話もトレーニングだと思う」③④
- ・ 「トレーニングって何の？」→「主に"言語化"だと思う」①
- ・ 「トレーニングは態度が変わっていくことも含まれそう。特に"正しいことを言わなければいけない"プレッシャーからの解放。」①②

"価値観の違い"について

- ・ カナダでの例「間違ってもOK」③④
- ・ 「高学年になると発言しなくなる」③④
- ・ 気象分野の参加者「気候変動の解決には、様々

な方法や解があるが、互いに主張だけしてしまふ。」④⑤

- ・ SDGs教育の例「フィリピンの現状を知る授業」③⑤

質問する=恥ずかしい？

- ・ 「哲学対話のようなルールの枠の中での対話トレーニングで、前述の"プレッシャーから解放"が出来るのでは？」①④
- ・ 「それが"楽しい"に昇華できればより良いのでは？」①②

問いの"レイヤー"について

- ・ 争いについて、国レベルだと「高次」。家族レベルは「低次」。低次の方が身近、誰にでも分かりやすい。=小学生にも分かる概念④⑤
- ・ 質問ワークでは「チャンクアップ」「チャンクダウン」という。チャンクダウン=自分事にする③④

### 5. 考察・まとめ

これまで挙げた通り、短時間での対話を体験するだけでも、SEL能力全般にわたる向上を期待することができよう。

哲学対話や哲学カフェについて、渡辺ら(2017)<sup>(3)</sup>は「哲学対話では、知的安心感(intellectual safety)のある場の設定が重要であり、哲学対話を行うことで、学習者にとって安心安全な学習コミュニティを形成できる可能性がある」と述べ、西塚ら(2021)<sup>(4)</sup>は、「高等教育における学習支援型哲学カフェは、専門的資本の成熟として理解されるコミュニティの成長を通じて、個を成長させていく場である」と述べている。

これらのことから、「安心して話したり聞いたりできる」コミュニティでの対話は、コミュニティ全体だけでなく、個々の参加者のSELを通じた能力向上が期待できると考えられる。それはまさに"答えのない問い"に向かつていけるだけの能力とも言えるかもしれない。

本稿執筆にあたり、当該プレカンファレンスのオーガナイザ・参加者の皆さまに感謝申し上げます。

#### 参考文献

- (1) 藤平昌寿：対話型コミュニケーションにおける意識変化の調査手法に関する考察2,教育システム情報学会第44回全国大会発表論文集, pp.197-198, 2019
- (2) 藤平昌寿：オンライン・オフライン哲学対話の実践報告,教育システム情報学会第46回全国大会発表論文集, pp.51-52, 2021
- (3) 渡辺博芳,山根健,江口建：「哲学対話」の手法によるクラスミーティングの試み,帝京大学ラーニングテクノロジー開発室年報第14巻, 2018
- (4) 西塚孝平,佐藤智子：学習支援としての哲学対話実践の可能性ー哲学カフェ「かんがえるソファ」を事例に一,東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, Vol.7, pp191-204, 2021